

# 博物館で収集すべき

## “種生物学” 的資料とは？

～ 多様な学術資料・データの円滑な流通のために～

神奈川県立生命の星・地球博物館 大西 亘  
e-mail: wohnishi@nh.kanagawa-museum.jp



### ● 背景

博物館に収蔵された生物標本は、伝統的には主として生物をその形態で区別する分類学のため、また生育記録として分布や分布の変遷を知る手がかりとして参照されてきた。さらに近年では、生物標本の DNA を介して地理的な遺伝構造や過去の遺伝的变化を探る「ミュゼオミクス (museomics)」のアプローチによっても、博物館の収蔵標本が注目されている。一方、現代の博物館では生物標本だけでなく、生物の姿やふるまいを記録した写真や画像 (静止画・動画)、音声データ、観察記録 (ノート・レポート)、計測データ等も資料として収集が進められており、マクロな生物学分野において必要とされる様々な情報が収集対象資料となっている。ここでは特に種生物学に関連する生物標本やその他の収集資料とそれらのメタデータについて、博物館と研究者、学術コミュニティにおける多面的かつ円滑な流通を目指し、その概要を紹介するとともに、利用・提供する際の注意点と課題について概説する。

### ● 博物館に集まる “種生物学” 関連資料とそのフロー

博物館は、収集した標本や資料を証拠として半永久的に参照可能なように整理するとともに、それらのメタデータをデータベース化して公開している。



### ◆ ポイント

- メタデータの精度や品質は、保証されていない。利用する研究者自身が標本や実データ、過去の引用文献等を参照し確認する必要がある。
- 論文中で引用資料番号を明示し、引用を標本収蔵機関に通知することで引用事実が当該資料のメタデータに追記され、公開共有される。
- 調査で得られた標本や関連データは、博物館の収集対象となる。  
\* 一部は大学リポジトリでも研究データとして収集されつつある。

### ◆ 課題

- 資料データベースポータルでは、メタデータの公開は不完全で、現状では実際の収蔵標本数の半分以下であることも少なくない。
- 論文中での引用資料番号 (ID) 明示は、分類学以外の学術誌では体裁上受け入れられない (想定されていない?) ことがある。
- 研究関連データは個々のデータ同士に構造があることがあり、研究者本人以外が整理しにくい。